



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	幼児期における着脱に関する研究：着脱パターンの解析 およびボタンかけと手指の巧緻性の関連性(審査結果の 要旨)
Author(s)	高橋,美登梨
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2309/150390
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか

幼児期の基本的な生活習慣(食事、睡眠、排泄、着脱、清潔)は、自立した生活の基本となるものであり、幼児期に目指す姿のうち、健康な心と身体、自立心、思考力の芽生えなどに関わる。本研究では衣服の着脱に焦点を当て、集団保育の保育者への調査と幼児の観察をもとに幼児期の動作の特徴を明らかにし、そこに見出された習得の過程から着脱の教育的意義について考察している。

着脱に関して幼児の発達をとらえる目安となる発達基準では「できる・できない」のいずれかで判断することが多い。しかしながら、幼児の着脱方法は成人とは異なり、また、保育者の援助を受けてできる場合もあれば、衣服の位置や部位によってできる・できない場合、全身運動を伴う動作もあれば手指を使う動作もある。こうした幼児の着脱を、年齢、服種、動作の内容でパターンに分類して分析するとともに保育者の援助内容を加味しながら幼児期の着脱の特徴を明らかにしたものは他に見受けられない独自のものである。日常的に繰り返される着脱は、幼児にとって衣服の形態理解を伴うものであり、運動能力において体幹の発達と手指の巧緻性向上の点から教育的価値を示唆している。着脱は生活の自立を促す点で価値を見出されてはきたものの、その内容を明らかにしたものは見受けられず、本研究はその点でも価値あるものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか

研究方法は、2章では集団保育の施設の保育者への質問紙調査、3～5章では幼稚園児の着脱などの観察による。質問紙調査は、保育者を対象として集団保育で行われる着脱の実態と着脱への意識について把握したものであり、着脱に焦点を当てた調査のほとんどが家庭保育を対象としている点でも、本調査は希少で価値あるものである。東京都23区内の幼稚園・保育所・こども園に1通ずつ送付し535施設(回収率41.2%)の回収が得られたこと、観察の受け入れを申し出てくれた保育所や幼稚園もみられたことは集団保育の現場でも関心を抱かれた内容といえる。本調査の結果は、その後の観察における対象児の年齢と分析方法を方向づける基盤となっている。

幼児は機嫌や観察者の声がけによる影響を受けやすく、観察においては統制した方法をとらずフィールドで行うことも多い。一方で、フィールドでの観察は遊びや会話など目的以外の要因が入り込み条件設定が困難となる。こうしたことを鑑み、3章と5章では援助なしで着脱ができる5歳児を対象とし降園時の着脱の様子を個別にビデオ撮影して分析している。3章では被服学の観点から服種(かぶり型体操着、前あきブラウス、ジャケット、カーディガン、ハーフパンツ、スカートなど)に分けて着脱の過程をパターンに分類し、成人との比較をもとに5歳児の習得段階を考察している。5章ではボタンかけに焦点をあて、手指の巧緻性との関連性を考察している。3歳児～5歳児に適応できる手指の巧緻性測定の方法を開発したことも価値あるものである。

4章では3歳児を対象とし、教室にビデオカメラを設置して観察し、援助を含めて登園時の着脱をとらえ、着脱のパターン分類とその出現頻度を服種ごとに整理した。合わせて援助の割合とその内容をカウントし、5歳児と対照させながら3歳児の着脱の特徴を明らかにしている。

本研究は、被服学、保育学、人間工学、リハビリテーションなどの学問領域での観察手法に学びながら分析手法を開発しており、学際的研究の発展に寄与するものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか

質問紙調査では、予備調査で内容を吟味し、修正後に本調査を開始した。対象は予備調査施設を除く東京都 23 区内の全集団保育の施設である。回答の返送をもって参加に同意したものとした。5 歳児の観察にあたっては、施設を通して保護者の同意を得た後、調査時に幼児が拒否の意思表示をした場合には直ちに中止し、無理強いしないよう情報収集した。(平成 26 年度目白大学の生命倫理審査の承認済み) 3 歳児の観察調査においては、保護者に直接説明を行い、個人情報を受け取らないこととし、データ分析においてビデオ情報が流失しない方法で行った。(平成 28 年度埼玉大学の生命倫理規定の承認済み)。

以上のようにデータの収集と分析には細心の注意を払い、適切になされたといえる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

質問紙調査より、集団保育で行われる衣生活の内容を把握し、着脱に対する保育者の意識や幼児の自立の程度などを明らかにした。質問紙調査の結果をベースにして、その後の観察調査では、対象年齢、服種、動作の内容などの分析視点を定めるとともに成人や障害者を対象とする先行研究の結果と比較しつつ、幼児の特徴を考察している。博士論文の内容は複数の学術雑誌に掲載されており、研究が学術的に高い水準にあることが認められている。また、1 章から終章までが段階を踏みつつ相互の関連性を示しながら博士論文としてまとめよく構成されている。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

これまで日常の着脱動作の繰り返しがどのような力を育むかについて客観的に示したものはほとんど見受けられなかった。一連の研究より、上衣は衣服の形態を理解する機会、下衣は体幹のバランスを取る機会、ボタンかけは手指の巧緻性を向上させる機会となることを明らかにし、生活動作を繰り返すことの意義を示すことができた。これらは保育者が幼児を援助する上での参考となるものであり、年齢に応じた子ども服の設計に関する基礎資料となるものである。

以上の点を総合的に判断し、本論文の審査委員 5 名全員一致にて、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士(教育学)の学位を授与するに相応しいものと判定した。